「あくまのしばし Christ The Lord Is Risen Again」

～讃美歌からの黙想～

Takako Nojiri

はじめに

私が洗礼を受けたのは、復活祭の日です。アメリカ中西部は前夜まで大雨、それが翌朝にはすっかり上がり、春の日差しが燦々と降り注ぐ美しい日となりました。その晴れやかな日は、復活祭に歌われる讃美歌、今回の 150 番の明るい旋律そのものであったと覚えています。
その讃美歌について調べていくうちに、私は思いがけずに心の中で長い旅を始めた事に気が付きました。

今回の讃美歌 150 番は、1954 年版の日本基督教団の讃美歌委員会の「讃美歌」では、訳詩の初行が**「あくまのしばし」**とありますので、それが 150 番の通称となっています。1997 年に発行された「讃美歌 21」では**「復活の主は」**というタイトルで「あくまのしばし」の原曲が 316 番として載っています。
「復活の主は」の歌詞は、東方教会の復活祭ミサの続唱「Vitimae paschali laudes …（過ぎ越しの子羊をほめたたえよ）」を元にしてミヒャエル・ヴァイセ(1488?~1534)がラテン語のテキストをドイツ語に訳したものです。そしてこの歌詞による **3 つの旋律**と、同じく更にそれを改訂したと言われるマルティン・ルターの歌詞と 4 つ目の旋律があります。そして更に原曲とルター版を用いたバッハの曲がそれぞれ何曲もあります。**復活**というキリスト教の奥義を表す讃美歌であることが複数の旋律を生み、それを、**5 番目の福音史家と言われるバッハ**が自作に何度も用いているのです。それだけこの讃美歌が特別なものであることを表しているのだと思います。
今回は原曲を含めたこの讃美歌の複数の旋律とそれにまつわる黙想を書いていこうと思います。

ボヘミア

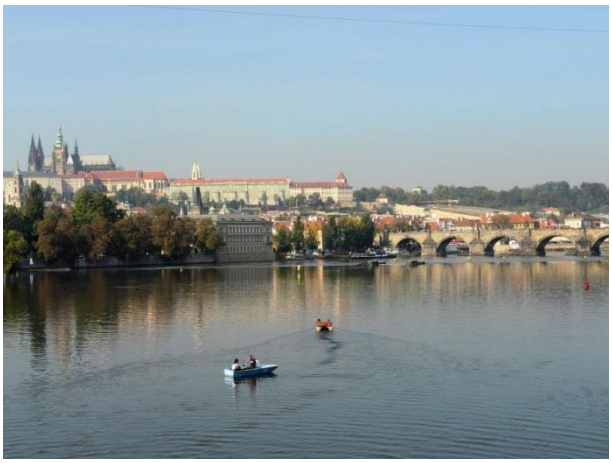
「ボヘミアン」という言葉がありますが、それは芸術を志す人間にとってその言葉が象徴するのは「さすらい」であり、「旅人」、「自由」、「貧しさ」、「芸術」、「孤独」、「誇り高さ」、「神秘」等々を含んだ一種の憧れのようなものを呼び覚ます言葉です。本来「ボヘミア地方、モラビア地方に住む人」という意味の言葉がどのような理由でそういった象徴的な意味を持つようになったか、本当のところはまだよくわからないのですが、今回の讃美歌の旅はその言葉の由来となったボヘミアから始まりました。

ボヘミア地方というのは現在のチェコの前身でポーランド南部からチェコにかけての地域で西に隣接するのはドイツ、東はモラヴィアです。
ボヘミア王国は 12 世紀頃に成立しました。中央ヨーロッパにあり、地政学的には重要な存在であった為、他のヨーロッパ諸国と多くの軍事的な鬩ぎ合いと共に文化的には密接な影響関係にありました。長い歴史を持つ国ですが、15 世紀からはハプスブルク家の支配下に入りました。

私がボヘミアの都**プラハ**に初めて行った時は、ウィーンからの列車を使いました。初めての国はいつもわ

くわくするのですが、その時は格別な期待がありました。それはチェコの芸術家達、ドヴォルザーク、スメタナ、ミュシャ、カフカ、ミラン・クンデラ等から想像すると…ヨーロッパの華やかな都市、ロンドンやパリ等の文化とは少し色合いが違う都市ではないか、誤解を恐れずに言うなら、大地の香りとミステリアスなイメージへの期待でした。しかし、初めてプラハに行った時に感じたのはそのイメージ以上に、非常に文化的で知的な香りが高く感じられる都市、品格を持つ毅然とした街並みの、中央ヨーロッパの正統派の古都であるということでした。

ハプスブルク王朝の首都ウィーンは華やかで権力のある都の名残が感じられますが、その支配下にあったプラハはウィーンを縮小したような形でありながら似て非なるもの、華やかさは劣るものの強い意志のようなものが感じられる古都です。そして旧市街を滔々と力強く流れるモルダウ川は、ドイツに入るとエルベ川と名前を変え、ドイツのドレスデンあたりでは両岸に優雅な風景を持つ美しさに変わります。初めはモルダウ川の勇壮さと、ドレスデンを流れる貴婦人のようなエルベ川が同じ川であるという事が、中々実感として感じられませんでした。そして川はドイツ国内を北上してハンブルクなどの都市を経由して北海に至ります。モルダウ川が交易や文化の交流としても中心的な役割を果たしたのだろうと思います。**スメタナの交響詩「モルダウ」**はモルダウ川の悠然とした流れと様々な川の表情を描写した音楽で、日本でも有名な交響曲の一つです。



プラハ市街とモルダウ川

ドレスデン エルベ川

また、一方で街にはプラハに到着する前に抱いていたイメージどおりのミステリアスな雰囲気もありました。世界遺産になっているプラハ城の周りのたくさんの土産物店では、中世の魔女伝説を思い起こさせる不気味で醜い顔をした、箒を抱えた年老いた魔女の人形が店一杯に売られています。その恐ろしい顔は「白雪姫」等の童話に出て来る魔女そのもののようで、それの持つ奇妙な魅力のようなものに惹かれて、思わずその中の一体を買ってしまいました。日本に持って来てその魔女人形を部屋に飾るとしばらくはその不気味な顔の存在感に閉口してしまい、買った事を半分後悔しました。しかし時が経って慣れてしまうと、かえって醜い顔も愛嬌のある顔に思えて「マリアンヌ」と、魔女らしからぬ名前を付けて部屋に飾ってあります。

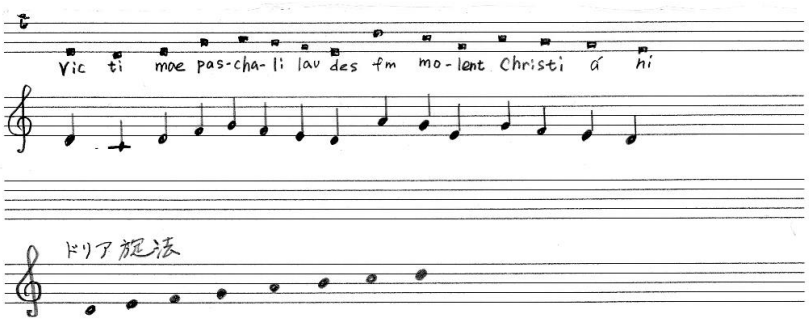
魔女人形 マリアンヌ

プラハ大学は 13 世紀に設立されました。1402 年、プロテスタントの宗教改革者**ヤン・フス（1369~1415）**はその学長となります。フスはドイツの宗教改革者、マルティン・ルターより 100 年以上前に宗教改革の先駆けとなった改革者です。貴族や民衆の支持のもとで教会改革運動を進めましたが、弾圧され「異端者」として裁判を受け 1415 年に火刑に処されました。
フスの改革を支持したボヘミアの人々による**「フス派」**はプラハを中心に広がっていきました。宗教的な改革だけでなく、封建社会の改革も求め、弾圧するカトリックや皇帝に対して戦います。1420 年から本格的な戦いが始まり、長期にわたってフス派が破れるまで戦いは続きました。和平に当たっては信仰の自由は認められたものの、社会的な抑圧は続きました。これを**フス戦争**と言います。やがてフス派の流れを組む一派が 1457 年頃**「ボヘミア兄弟団」**としてモラヴィア方面に移りやがて「モラヴィア兄弟団」と呼ばれるようになります。それ以降も弾圧は続き、1620 年頃にはドイツのザクセンに移ります。ザクセンは前述のモルダウ川を北上した位置にあります。
その「兄弟団」の中にいたのがこの讃美歌の**作詞者であるミヒャエル・ヴァイセ（1488?~1534 ）**です。彼はポーランドのニーサで生まれ、クラクフ大学で学び、ブレスラウでフランシスコ修道会の修道士となりました。やがてプロテスタントに改修したために 1517 年にブレスラウを追放されます。その後プロテスタントの神学者、讃美歌作者となり「兄弟団」に加わります。ヴァイセは、**プロテスタントの最初の讃美歌集**を 1531 年に編纂してその中の多くを自分で翻訳、作曲をしています。この讃美歌も「兄弟団」の讃美歌としてヴァイセがラテン語をドイツ語に訳したものです。また、編纂した讃美歌の歌詞や旋律の多くがボヘミアに古くから伝わるもので、それをヴァイセが翻案しました。またそれだけでなく自分も作曲しています。

原曲の変遷

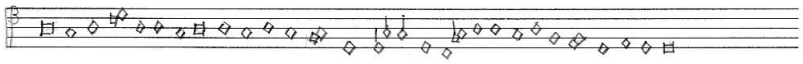
それでは少し讃美歌の変遷を記していこうと思います。
この讃美歌の原詩は **”Christ ist erstanden”（「主、生き給えば」「キリストは蘇り給う」）**です。古いドイツ語の宗教民謡からヴァイセが訳しました。

（譜例 1）元々の旋律でカトリックのラテン語のミサの**復活祭の続唱「過ぎ越しの子羊をほめたたえよ」**に由来しています。こちらの楽譜は、5 線譜以前のネウマ譜と 5 線に改めたものです。グレゴリオ聖歌の旋法のドリア旋法でできています。



（譜例 2）この曲に関して今見られるもので最初期の頃の楽譜です。5 線ではありますが、ネウマ譜に近い書法で書かれています。

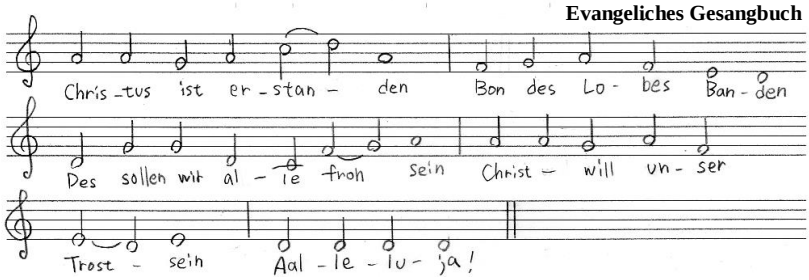
16 世紀の記譜による　Christ ist erstanden



（譜例 3）現代の記譜に近くなった初期のものです。

現代の記譜に近づいた初期のもの　Christ ist erstanden

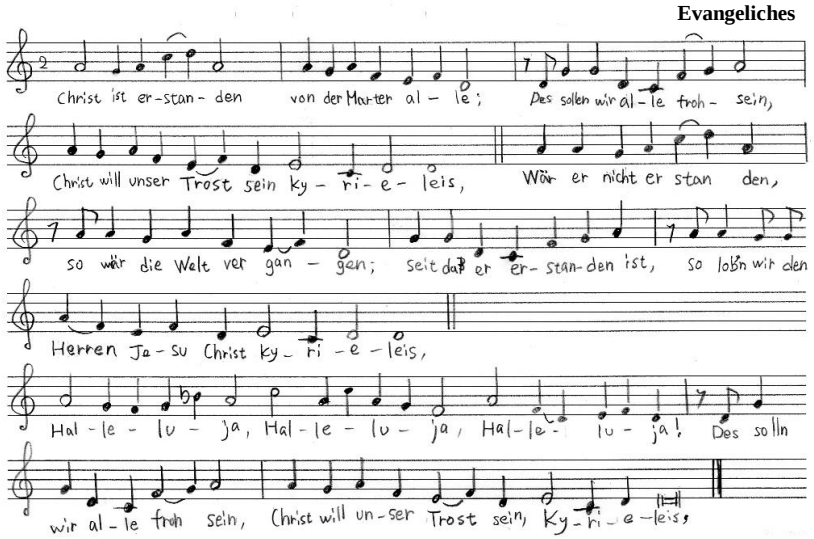
Evangeliches Gesangbuch



（譜例 4）ドイツの Lemgo（レムゴ市）の聖ニコライ教会で使われていた讃美歌集 Evangelisches Kirchengesangbuch（福音讃美歌集）からの写譜で、その讃美歌集では 75 番となっています。

Christ ist erstanden

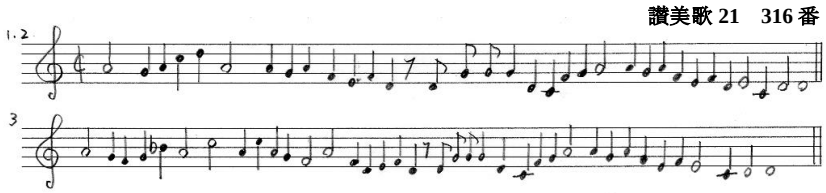
Evangeliches



（譜例 5）日本基督教団讃美歌委員会の讃美歌 21 中の 316 番「復活の主は」です。この讃美歌は、後にヨハン・セバスチャン・バッハが教会カンタータ等に使用しています。（BWV66/6、BWV276、BWV627）

「復活の主は」

讃美歌 21　316 番

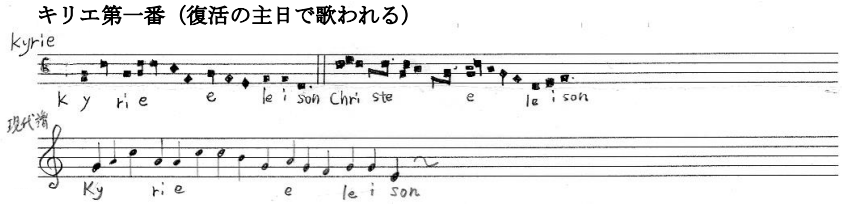


また、以下は「復活の主は」のドイツ語の歌詞の日本語訳です。

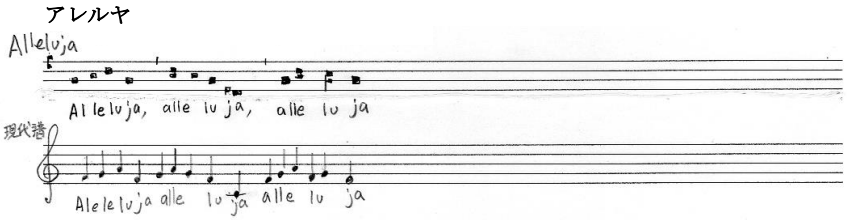
キリストはよみがえり給いぬ。
あらゆる責め苦より解かれて
それ故に我らこぞりて歓ばん。
キリストが我らを慰めんと欲し給えばなり
キリエライス
主のよみがえりなかりせば
かくして世界は滅びに向かわん
我らは主イエスキリストを讃えん
ハレルヤ　　（訳詩　Robin@CockRobin96）

‘Kyrieleis’　という歌詞はグレゴリオ聖歌の’Kyrie eleison‘(主よ憐れみ給え)’からきています。

（譜例 6）グレゴリオ聖歌の「復活の日のミサ」で歌われる’Kyrie eleison’のネウマ譜の一部の写譜です。



（譜例 7）グレゴリオ聖歌の’Alleluja’（ハレルヤ）のネウマ譜の一部です。



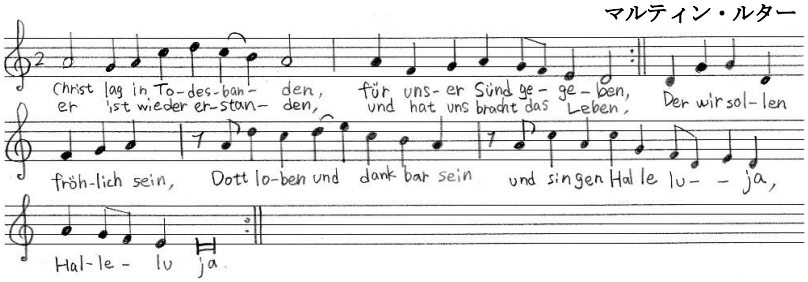
ヴァイセは**マルティン・ルター（1483~1546）**との交流が深く、ルターも讃美歌集の編纂に協力しています。

（譜例 8）ルターが”Christ ist erstanden”を元にして作ったと言われる**”Christ lag in Todes banden（キリストは死の縄目に繋がれたり）”**です。こちらの楽譜も Lemgo 市の聖ニコライ教会所有の讃美歌集から写譜しました。この讃美歌集では 76 番となっています。また、讃美歌 21 では 317 番「主は我が罪ゆえ」として載っています。

この讃美歌もバッハがいくつもの教会カンタータに使用しています。(BWV4、BWV277、BWV279、BWV625、BWV695、BWV718)

キリストは死の縄目に繋がれたり

マルティン・ルター



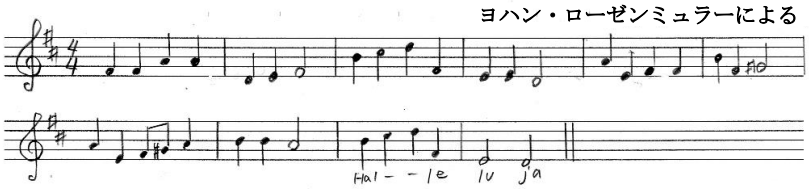
その後フス派の“兄弟団”は「18 世紀には“ヘルンフート（主の守り）”と呼ばれる共同体を形成して存続し続け、今も存在しています。18 世紀のジョン・ウェズレーに大きな影響を及ぼし、18、19 世紀の世界宣教に大きな貢献をしました。アメリカのペンシルベニアに渡ったひとたちもいます。20 世紀のボンヘッファーや、ドイツ告白教会の霊性にも影響を及ぼしています。（和泉福音教会青木義紀牧師）」

讃美歌 150 番　ローゼンミュラーとヴェネツィア

日本キリスト教団の讃美歌集で 150 番となっている「あくまのしばし」には、2 つの旋律が載っています。（譜例 9）作詞がミヒャエル・ヴァイセ、曲は「ヨハン・ローゼンミュラー（1619~1684)によるとされる」と書かれている旋律です。

あくまのしばし　讃美歌 150 番

ヨハン・ローゼンミュラーによる



ローゼンミュラーは多くの作品を残したバロック時代の優れた作曲家です。とても興味深い人生を送った人で「謎多き人」です。

彼はライプツィヒの神学校で学び、1645 年から 1645 年にかけてヴェネツィアで音楽を学びました。神学的、また教会音楽家としても優れた才能を現し、ライプツィヒの「聖ニコライ教会」の合唱団の指導者、また後にバッハがオルガニストを務めて数々の偉大な曲を作曲した「聖トーマス教会」のオルガニストも務め、次期楽長になることが内定していましたが、合唱団の少年達に同性愛を強要したと疑われて 1655 年に投獄されてしまいます。詳細な審議が行われる前に彼は脱獄してイタリアのヴェニスに行き、1658 年頃から聖マルコ大聖堂でトロンボーン奏者として、また作曲家としてジョバンニ・ローゼンミュラーというイタリア名で活動を始めます。

冬が寒くて辛いドイツの人々は後にゲーテが詩の中**「君知るや南の国」**と詠ったように、イタリアに憧れました。イタリアはその頃、文化、芸術、政治等で、他のヨーロッパ諸国より遥かに進んでいました。ローゼンミュラーよりおよそ 70 年前、**「血潮したたる」**を作曲者である**ハンス・レーオ・ハスラー**（1564~1612）は、ローゼンミュラーと同じくヴェネツィアで学んで、イタリア音楽の情緒的な美しさをドイツに伝えた初めの作曲家です。ハスラーの後、ドイツの多くの音楽家がイタリアに渡ってイタリアの豊かな情緒ある音楽表現をドイツに持ち帰る事になります。それによってドイツのバロック音楽は厳格さと情感を兼ね備

えた深みのある比類ないものとなります。その役割の一端をローゼンミュラーも担う事になったのです。

私はヴェネツィアで年越しをしたことがあります。冬でも寒さはあまり感じず、厚いコートでは汗ばんでしまう気温です。あいにく天候は雨で運河も建物も沈んだ色をして、文学や絵画で描かれるような美しさを初めは感じられませんでした。宿泊したホテルは運河に面していて 1525 年に建てられた昔のドージェ（元首）の邸宅、古式豊かな普通のヨーロッパタイプのホテルで、長い歴史を持つだけに少し怪しげな雰囲気も漂う建物です。1584 年にヴェネツィアに来たハンス・レーオ・ハスラーも、1584 年に来たローゼンミュラーも運河に建つ優雅なこの宮殿を目にしたに違いありません。プラハといいヴェネツィアといい、ヨーロッパの古い街には何か物語めいた雰囲気があります。

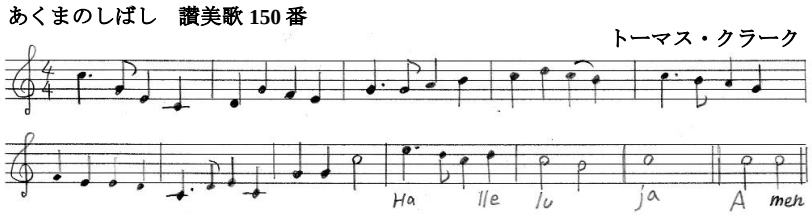
ヴェネツィア 聖マルコ大聖堂と運河

聖マルコ大聖堂は、福音記者マルコの聖遺物（遺骸）が祭られているヴェネツィアで最大の教会で、ヴェネツィアの政治、宗教、文化の中心を成す教会です。
そこを訪れた時に印象的だったのは様々な装飾とモザイク画を含めた数々の絵画です。海洋貿易国だったヴェネツィアが、いかに豊かな国であったか、その富で芸術文化が花開いていったかが分かります。聖マルコ大聖堂はまた、イタリアルネサンス音楽、イタリアバロック音楽における「ヴェネツィア楽派」の中心地でもありました。お抱えの音楽家たちも多く、17 世紀にはジョバンニ・ガブリエリ、クラウディオ・モンテベルディなどの錚々たる作曲家達が、聖マルコ教会で演奏されるために多くの曲を作りました。そこでローゼンミュラーは名声を得て **1682 年ブランズヴィック＝ヴォルフェンビュッテル公国**の君主アントン・ウルリヒによって招かれ、ドイツに帰国します。アントン・ウルリヒ公は、啓蒙主義の絶対君主で自分自身も小説やオペラの台本、讃美歌などを書くなど、芸術にも秀でた君主でした。ウルリヒ公にとってドイツの厳格な音楽理論と、イタリアの情緒を併せ持ったローゼンミュラーは大きな価値のある音楽家であったに違いありません。ローゼンミュラーはドイツから逃亡した過去の不名誉を挽回して晩年を宮廷楽長としてウルリヒ公の宮廷で活躍し、多くの宗教曲や世俗曲を残して 1684 年、同地で没します。挫折と栄光の人生でした。

カンタベリーのトーマス・クラーク

1 番新しい旋律は（譜例 10）の、**トーマス・クラーク Thomas Clark (1775~1859)**のものです。クラークは、イングランドのカンタベリーに生まれ、多くの讃美歌を残しました。カンタベリーは大聖堂で有名な街です。幸いにも第 2 次世界大戦の折のドイツ軍の激しい空爆にもかかわらず、大聖堂は戦焼を免れました。
クラークの生きた時代は産業革命、農業革命、フランス革命、ナポレオンの台頭による封建制度の崩壊…社会構造が大きく変化した時代です。音楽の面でもベートーヴェン（1770~1827）、シューベルト

（1797~1828）、その後のショパン（1810~1849）、シューマン（1810~1856）などのロマン派の出現でクラシック音楽は大きく発展します。
そして 11 世紀頃から歌われたこの讃美歌の旋律は、トーマス・クラークの曲では大きく変化している事がわかります。
中世の旋律（譜例 1）の長調、短調の間のような旋律は、ドリア旋法というグレゴリオ聖歌の旋法から出来ています。（ドリア旋法は栄光を表す意味を持つ旋法でもあり、復活の主を讃美するのに相応しい旋法であると言えるでしょう。ドリアから発展した二長調も同様の意味を含みます。）
（譜例 10）のクラークの旋律は弾むような付点のリズムを使い、まるで行進曲のような表情を持っています。特に最後の「ハレルヤ」が、他の作曲家の曲より飛びぬけて高い音で歌われます。高らかで晴れやかな勝利宣言のようです。今の時代においても耳慣れた親しみやすいものとなっています。



今、私はトーマス・クラークに関して多くの資料は持ち合わせていません。彼の功績や人生に関しても、グローブの音楽家辞典に掲載されている事から、優れた讃美歌作家だったという事を推察することしかできないのがとても残念です。

終わりに

讃美歌の 1 曲 1 曲はとても短いのですが、讃美歌の歌詞、旋律の成立過程はそれぞれに語り尽くせないドラマと計り知れない祈りが込められています。
私は讃美歌の由来を探すこと、また、作者の人生と信仰を辿ることを「讃美歌の旅」と名付けています。
今回の旅はチェコ、ポーランド、ドイツ、イタリア、イギリス…そしてそれはまた、1000 年以上にわたる時間の旅でもありました。文章にしてみるとあっけないものですが、とても長い旅をしてきたような思いがします。そしてまた、次なる旅への期待にわくわくしているのです。

参考文献　「キリスト教音楽の歴史　初代教会からバッハまで」金澤正剛
「キリスト教と音楽」　金澤正剛
「グレゴリオ聖歌選集」　十枝正子
「新版　讃美歌　その歴史と背景」原恵　横坂康彦
「地図で学ぶ宗教改革」ティム・ダウリー　青木義紀訳
「讃美歌の研究」　竹内信